

研究テーマ：単語の定着を図るための指導の工夫

所属 高知県立山田高等学校

氏名 寺田 葉子

RG SH5

1 研究の背景

対象とするのは 1 年次、2 年次と続けて英語 I を履修している 2 年生の商業科クラス。語彙力に乏しく、英語の挨拶に決まり通り元気に答える事はできるが、少し長い英文で質問するとすぐに日本語訳を求め、日本語でしか答えられないことが多い。英語に対して苦手意識を持っている生徒もあり、簡単な単語さえ覚えるのが困難な生徒もいる。生徒間での理解の差もあり、生徒は授業に集中できず、居眠りや私語が多い状態である。

2 リサーチクエスト

英語が理解できる喜びを知るには、語彙力をつけることがまず必要だと考えた。簡単な単語が分からないと、当然授業に集中できない。そこでリサーチクエストは次の通りとした。

語彙数を増やすことによって英語への苦手意識を取り除き、授業に集中させるにはどうすればよいか。
--

3 予備調査**3-1 予備調査 1 授業観察（7 月の現在完了形練習の授業より）**

- ・繰り返し書いたり発音したりする練習をしたはずの動詞の過去形、過去分詞形が定着していない。
- ・ビンゴゲーム、練習問題など、生徒にとっては活動が多すぎると感じたようである。できるだけ英語だけで授業を行いたかったが、結局日本語が多く飛び交っていた。

3-2 予備調査 2 1 学期末授業評価アンケート

英語の力を伸ばしたいと思う生徒は 7 割程度もいるのに、授業を楽しんでいると感じた者は 3 割程度で、生徒が望む授業ができていないことが分かった。授業への興味、関心のひきつけ方に対する評価も低い。理解が遅い生徒に合わせた授業をしていたが、それを遅いと感じる生徒も数名いてどちらに進度を合わせるべきか迷う。

3-3 予備調査 3 1 学期末 生徒の自己評価アンケート

授業の内容をある程度理解できた生徒は 7 割程いるのに、授業に意欲的に取り組んだ者は 4 割しかいな

い。その原因として「単語を覚えることや英文を読むことが困難」「おもしろくない」「将来役に立つと思わない」などのコメントが挙がった。自分でできないと思いこんでいる生徒もあり、苦手意識を除くための対策が必要である。

4 仮説の設定

仮説 1： 語彙導入の際に、集中して聞く時間と発音練習の時間を十分取り、自信をもって英語を発音できるようになれば、語彙を増やそうとする意欲がわくだろう。

仮説 2： 語彙の定着を図る活動がたくさん与えられれば、品詞の区別ができるようになり、文の中で語彙がどのような意味を持っているか読み取れるようになるだろう。

仮説 3： 学んだ語句を、ある程度まとまりのある文章の中で読み取る事ができ、文の理解にまで発展させることができれば、授業中に居眠りすることなく授業に集中するようになるだろう。

5 計画の実践

仮説 1 の実践方法： 発音指導の徹底、ALT とのチームティーチングで生の英語を直接聞かせる、

クリス・クロスゲームで単語の意味や発音の仕方を問いかけて授業への全員参加をはかる。

仮説2の実践方法： 例文クイズでどの単語がどの文に入るべきかを推測する、新出単語・語句・文

法事項を用いてビンゴゲームを実施する、反復練習を行う、その時間内に扱った語句を使い、例文を3つ書かせる

仮説3の実践方法： 読解用ワークシートで内容を読み取るヒントを与える、文単位で音読指導の徹底を図り、音読テストを実施する。

6 実践の結果

仮説1に対して：ALTの話には、生徒はよく耳を傾け、集中して聞こうとしていた。音読練習の声もよく出ていたように思う。クリス・クロスゲームを利用した単語の復習は、覚えていない生徒も必死で思い出そうとする姿が見られた。

仮説2に対して：例文クイズは一瞬集中するが、補足説明も必要な文があり、その語句の印象付けは薄かったかもしれない。ビンゴゲームもゲームには参加するが、その語句の定着につながったかどうか疑問である。自分で文を書かせる活動はきちんと実行できなかった。

仮説3に対して：読解用ワークシートは、英文を読み取るヒントになったようである。和訳よりは生徒は興味をもって参加した。音読テストは、1レッスン通して音読するだけのことであるが、普段声を出せない生徒もよく練習をしていた。

7 結果の検証

7-1 授業評価アンケート-1学期末と2学期末の比較

相変わらず英語の力を伸ばしたいという意欲をもつ生徒は多く、英語が「好き」に変わった生徒も若干増えた。しかし、授業を楽しいと感じた者は3割程度にとどまったままである。1学期に比べると授業の工夫をしたつもりだが、楽しいと感じた生徒が少ないのは問題である。授業への興味、関心のひきつけ方に対する評価は、半数以上が「まあまあ良い」以上の評価になったが、同時に説明の仕方に対する評価も上がった。対象の単語を使う場面の提示を多くしたことで、意味を理解しやすくなったものと思われる。しかし、英語に対する苦手意識をもっている生徒は、以前と変わらず授業が退屈だと感じたようである。

7-2 生徒の自己評価アンケート-1学期末と2学期末の比較

授業の内容を理解できる生徒とできない生徒の差がますます大きくなった。また、授業の学習効果があったと感じる生徒が1学期よりも減っており、リサーチクエスションの目的があまり達せられなかった。

授業に集中し、意欲的に取り組んだ生徒もまだ半数程度であり、授業の改善につながったとは言えない。学習効果があった点をたずねると、「語彙力」と答えた者はわずか2人であった。その代わり、「読解力」「文法」に効果があったと答えた人数の方が多かった。

8 成果と今後の課題

自分の授業のどこかに問題点があることを漠然と感じてはいたが、今回のようにある問題に的を絞って改善を図ろうとしたのは初めてのような気がする。生徒の実態や自分の授業を客観的に見つめることで、授業準備に対する意識が少し変わった。単語の定着を図るための取り組みを計画し、わずかではあるが、生徒もその取り組みに応じてくれる生徒も見られた。

しかし、英語に苦手意識をもつ生徒には成績面から見ても授業の態度から見ても、あまり大きな伸びはなかったように思う。高校入学時点ですでに英語に拒否反応を起こす生徒の意識を変化させることはかなり困難であるが、伸びた生徒も実際にいることも考えると、まだ改善の余地はあるのではないかと思う。

意欲がないように見える生徒も、実は英語の必要性は感じていることに気付いたことが今回の収穫である。どうして授業に集中できないのか、生徒のせいにはせず授業次第で生徒が変わると信じて取り組みを続

けたいと思う。問題点を確定したものの、仮説の立て方を明確にすることができず、自分でも曖昧に進めてしまっていたので、これからも客観的に生徒や授業を見つめる姿勢をもち続け、今回解決することができなかったリサーチクエスチョンを、3学期も問い続けたい。